

相沢 育哉 (Aizawa Ikuya)

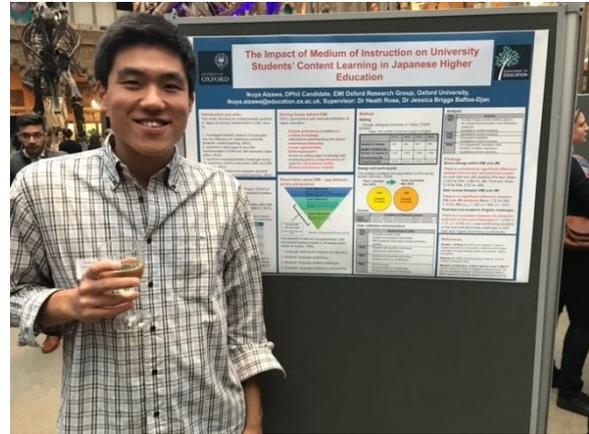
2020～2021 年度奨学生

オックスフォード大学 教育学部 博士課程

英国・オックスフォード大学の博士課程に所属している、相沢育哉です。2020年より坂口財団日本人留学生として新規に採用して頂きました。日頃より皆さまからご支援・ご指導を頂いております。この場をお借りして深く感謝申し上げます。学びの多い留学を実現させ、留学終了時にはご支援を頂いている財団の皆さまに良い結果報告ができるよう誠心誠意、研究生生活に励んで参りたいと存じます。この半期報告レポートでは、主に留学先での研究生生活について報告させていただきたいと思います。

私は父の仕事の関係で幼少期を台湾で過ごしました。母語である日本語以外の言語に触れながら育った私は、幼い頃から常に言語習得の仕組みに興味があり、大学では言語学・言語教育学を専攻しました。現在は、オックスフォード大学・教育学部の English as medium of instruction (EMI) 研究所に所属をしています。EMI 研究所は英語で専門教科を学習・教授する際に学生や教師が直面する課題やその際に必要となる英語能力を特定することを目指しています。私の博士論文では、日本語を母語とする日本の大学生が専門教科(例:歴史学、化学)を英語で学習した場合と日本語で学習した場合に使用する媒介言語によって学習に差異が生じるか、また十分な専門教科の学習にはどの程度の英語能力が必要なのかを調査しています。

現在、日本では数多くの大学が文部科学省から「スーパーグローバル大学」に認定され、英語を介して専門教科を教えるプログラムを開講しています。一見すると英語能力と専門知識の両方を同時に強化することを目標とする一石二鳥な取り組みですが、英語開講の授業を成功



2019 年 Poster Conference
於オックスフォード大学自然史博物館

に導くためには、学生への手厚い学習支援が必要です。研究を通して、EMI プログラムに所属する学生が英語で学習した場合であっても、日本語と同等の質を保ちながら専門教科を学ぶことができる学習支援策とカリキュラムを提案したいです。

また、博士論文の執筆と同時進行で、オックスフォードの現地中学校で EAL(English as Additional Language) と呼称される、英語以外に他の言語(特にアラビア語と東欧言語)を家庭で使用する移民の背景を持つ子供の英語能力(特に語彙力)と学校での成績の関係性を調査しています。この取り組みで私は生徒の英語の使用語彙力の豊かさを統計的に分析しています。言語能力が専門教科の学習に与える影響はまだ広く浅くしか研究が行われていません。この研究を通して、言語能力が疎かであっても学校で専門教科を学習せざるを得ない状況にある子供達への学習支援方法を提示したいです。

大学では上記の研究活動や学部での非常勤講師のアルバイトの他、国際論文誌への出版活動も積極的に行うことを心がけています。博士

課程を修了する要件は国、各大学によって異なります。オックスフォード大学の人文・社会科学分野の場合は、viva（口頭試験）を各学年終了時に受け、すべて合格すること・博士論文（100,000字）の提出が要件です。ただ、博士課程が修了した後、出版論文や講師経験が無い場合には、即戦力にならないとみなされ、ポストドクや常勤講師の仕事を獲得することは非常に困難だと言われています。この理由から多くの博士課程所属学生が博士論文の他にティーチングやジャーナル掲載のため論文執筆に時間を費やし、本業である博士課程の論文と両立するのに手を焼いているのが現状です。ただ、初稿版の論文を学会誌に提出してから、実際に出版に漕ぎ着けるまでに複数回に渡る修正を経て1年以上かかることもざらにあるので、中には博士の論文のみに専念して、博士終了時に論文の出版に取掛かる学生もいるようです。考え方は十人十色ですが、英国の博士課程制度は自身の研究に専念できる反面、ティーチングやジャーナルへの出版の機会が多くないという欠点も浮き彫りになっています。この点でも英国の博士課程制度はティーチングが義務化されているアメリカの博士課程の制度と比較されることも多い印象を受けます。

また、博士課程所属中は孤軍奮闘、論文を黙々と書く日々が続きます。自分が言語教育学の研究をしていることも影響して、言語能力が自分の認知力や思考力に与える負の影響を考えることが多々あります。英語で文章を構築し、議論を展開する自分の能力の限界を痛感することも日常茶飯事です。肝心なのは議論の内容であって、言語力ではないというのは建前で、本音は論文執筆には高い言語力と表現力が求められます。自然科学と比較して人文科学と社会科学の学術分野では特に高い言語能力が必要だと言われています。指導教官や学会誌の査読者の先生方からも手厳しい評価をいただき自尊心が傷つくことも頻繁にあり、言語能力の

面で日々悔しい思いをしています。

最後にオックスフォード大学でこのような研究生活にどっぷり浸かることができているのも、坂口財団の皆様をはじめ、私の研究活動を支援してくださる方々のお陰です。坂口財団のみなさまは私の研究はもちろんのこと、留学先での生活のことも常に気に留めて下さっています。これまでも滞在先の寮のことや指導教官との関係のことまで様々なことを相談させていただく機会に恵まれてきました。このような大変素敵な財団の皆様に巡り会えたことに深く感謝しております。

(2020.9 記)